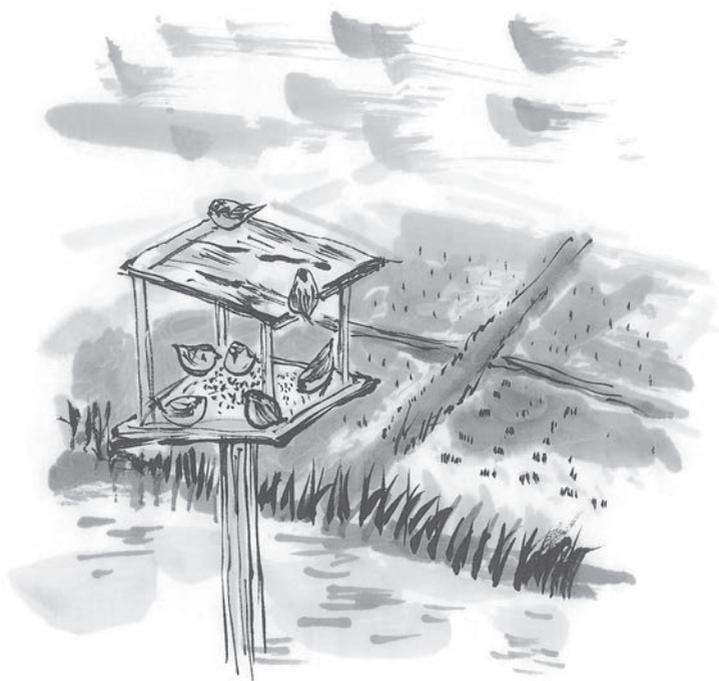


一羽のスズメ



宮本富夫
(高松大学 名誉教授)

何日か前、庭を歩いていて足元からスズメが飛びたち、こちらがびっくり。ほんの少し飛んですぐに休む。これにもびっくり。巢立ちの時期でもないこの時期に、巢立ち間もない雛の動きをとるスズメ。しかし、スズメの口の周囲に黄色の帯状のものは見つからない。成鳥らしい。体のどこかに不具合でもあるのだろうか、少し長い距離を飛ぶことがむずかしそう。近隣に生息するスズメのほとんどは人の気配を察知するやいなやすぐ飛び去る。多くの場合、集団で行動する。このスズメはこういったことができないらしい。何年振りかで訪ねてきた従妹との話の中、スズメのことが話題となる。彼女の住む市街地ではスズメの数が減り、見かけなくなっているとのこと。私の住む里山地域でもスズメの数が以前と比べかなり減ってきているように思う。どこかへ移動したのだろうか。集団を構成するスズメの個体数そのものが減っているのであれば、稲の収穫時期のスズメによる被害を気にかける

くてよくなるが、スズメがイネなどの害虫も食べていることを考えると、心境は複雑、そして少し心配。スズメを見かけにくくなった要因は何なのだろうか。

稲作では、くず米が生ずることは避けられない。減農薬栽培でイネを育てると、虫の被害を受ける米、生育不良の米が少し多めに生ずることは避けられない。自然界の循環のことを考えると、こういったくず米をそのまま土にかえし、土にすむ動物や微生物の栄養源の足しにすると、田の土壌にはいいのかもしれない。肥料分として翌年の収穫にたぶん反映されるだろうから。しかし、我が家ではここ何年かくず米の一部を野鳥に与えている。野鳥といっても、スズメとキジバト、たまにカラス。この三種が主な食餌者。庭に専用のエサ台を設け、くず米を提供する。自然界のエサが乏しくなる頃から始める。毎年このことなので、エサ台にくず米を用意すると、スズメが目ざとく見つけ、集団でやってくる。キジバ

トはベアでやってくる。上空から見ることの強みだろうか。エサ台には雨除けの屋根が用意されていることはあまり影響してなさそう。やってくると、にぎやかなさえずり。楽しそうな雰囲気。食餌風景が展開する。エサがなくなっているのにこちらが気づかずにいた翌朝は特ににぎやか。少し音の高いさえずりが、聞きようによってはエサをねだっているように聞こえるから不思議。

ところが、早期栽培のコシヒカリが稔りをむかえる頃になると、スズメの訪問がピタリと途絶える。新米の味はスズメにとつてもやはり魅力らしい。梅雨、気温の高い夏を越したくず米とは味が雲泥の差なのであろうか。確かに、成熟前のイネの種子は柔らかく、吸うとほのかに甘くて私の口にもいい味。中はミルク状、胚乳とはうまく名付けたものである。スズメはこの味をどこかで学んだのだろうか。成熟期をむかえつつある稲田に群れで飛来し、にぎやかに食餌を始める。この時期のイ

ネの種子をねらっているのはスズメだけではない。キジバトも、そして他の野鳥も。イノシシも。イノシシはイネの種子をすくうようにかみとり、クチクチュと中の甘味を堪能。そして咬みカスをベツ。もみ殻の部分はのど越しがよくないらしい。

今年是我が家のエサ台に、一羽のスズメがコシヒカリの成熟期が始まって飛来しつづけている。どうやら先のスズメらしい。ひとりでモクモクとくず米を食べている。飛翔能力がいまだに充分でないらしく、集団行動をとにもすることが難しいらしい。庭のあちこちを少し飛ぶ、木の繁みで休むを、繰り返している。本来なら、生き残ることがむずかしい個体なのかもしれない。運よく、今のところ生きています。少しハンディを背負うスズメでも生き残ることができる空間が我が家の近辺にあると考えると、少しうれい。生き残ることができるか、そうでないか能力の高い、低いによって決められないということなのだろうか。生き残

ることができるのは、たまたまのことなのだろうか。自分の生きられる場を見つげることのできた個体は生き残ることができるといふことなのだろうか、考えさせられる。

少し様子が変わったスズメに気がついて、我が家周辺の野鳥のことが気にかかりはじめる。そういえば、今年の夏は、ホトトギスの鳴き声を聞く機会が少なかった。ホトトギスの谷渡りを見るのがなかった。カラスは激減して二羽のみ。ヤマガラは飛来も減ってきている。周辺で何かが少しずつ変わってきているのだろうか。カエルの鳴き声も心なしか弱かった。ヘビとの出会いは多かった。生きものの数においてバラスが揺らぐ、自然界では通常のことかもしれないが、少し心配。この夏、気象の変動幅が大きかったことと関係しているのだろうか。人為的な要因が絡んでいるのだろうか。少し揺れ幅の大きかったこの変化が今年一年のことであれと願いつつも、気にかかる。

その後、先のスズメを見かけなくな

る。飛翔能力を発達させ仲間と集団行動をすることができるようになったのだろうか。飛翔能力の弱さが原因となつて天に召されたのだろうか。前者であれと願う。縁あつて一羽のスズメに心魅かれた、暑かつた夏もようやく終わりはじめていることに気づく。



矢切の渡し（上） 関八州夢幻譚



池田 一 貴

小雨のそほ降る利根川の堤に、母の姿を見た。
傘もさしていない。

「おっ母さん、ごめんなさい……」

舟から頭を下げる娘に対し、母の唇は「百合の香。もう、帰ってくるんじゃないよ」と動いていた。水面をたたく雨音が声が聴き取りにくい。だが、しっかりと伝わっている。

「はい……おっ母さん、きつと……」

声を震わせる百合の香の細い肩を、源次楼がぎゅつと抱きしめた。そのとき、別の土手に武士らしい一団が現れ、先頭の三、四人が長い筒を構えた。鉄砲である。

「撃てー」

役人の号令と、

「伏せてー」

母の金切り声とが切れ切れに届いた。小雨をつらぬいて銃声が続けにとどろく。船頭までが驚いて伏せている。

「なあに、中りゃあしねえー」

源次楼はそう叫ぶと、船頭から艀を取り上げ、かわりに漕ぎはじめた。風と雨の中、ゆらゆらと揺れる小舟を狙って、舟客に銃弾を命中させるなど、ほとんど神業に近い。柴又あたりのへっぴり

腰の足軽同心どもにそんな神業は無理だ。無宿人として喧嘩の場数だけは踏んでいる源次楼には、あたりまえの判断だった。

この時代、国定忠治や清水次郎長らも喧嘩に鉄砲や短筒を持ち出していたから、無頼どもにとつてそれがどの程度の威力をもっているかということは、よくわかっていた。喧嘩の武器として最強なのは、やはり日本刀——長脇差——であることも常識である。

「お前さん、度胸があるなあ」

別れ際に船頭が褒めるので、源次楼は心付けをはずんだ。

「いや、迷惑をかけちゃまった。戻ったら役人の詮議があるだろうが、そんなときや、あの無宿人に長脇差で脅されました、と言えがいい」

「ああ、そうするよ。達者でな。そちらの御新造さん（奥さん）も」

御新造と呼ばれて、十七歳の百合の香はぼつと頬を染めた。早朝、母が髪を丸髷に結び直してくれた。既婚女性のしるしである。

役人の銃撃には続きがなかった。いつの間にか、鉄砲をもつ武士たちの足元に数十匹の蛇が絡みついていったからだ。武士たちは鉄砲を捨てて逃げ惑った。土手には蛇が多いとはいえ、数十匹と

は不気味である。何の兆しかと誰もが訝った。

利根川は昨日からの雨で増水している。この矢切の渡し付近は、現代の河川区分では江戸川と呼ばれるが、当時上流はむろんのこと、このあたりの下流まで含めて利根川と呼んでいた。増水で蛇が流れてきたのかどうかはわからない。

じつは、源次楼はこの百合の香という女を旅の道連れにするつもりなんぞ、これっぽっちもなかった。女連れの旅はなにかと面倒だ。とくに無宿人にとっては。

女が必要なら飯盛女（宿場女郎）で間に合う。素人の生娘なんぞ気疲れ以外の何ものでもない。まったく何の因果でこんなことに……。

最初に駆け落ちを持ちかけたのは百合の香のほうだった。「私を連れて逃げて」と。男としては悪い気はしない。しかしそれは、相手が別嬪だったらの話だ。器量でいえば、百合の香は村娘のなかでも下の部類だろう。江戸市中の垢ぬけた娘たちのなかに置けば、下の下か。要するに、源次楼にとって武勇伝の足しになるような器量良しとは程遠い。だから、駆け落ちも「だめだ」と言下に断った。女の願いをこうも無下に断ったのは初めてだったかもしれない。

しかし、どんな幻術に誑かされたのか、いつの

間にか、駆け落ちに同意していた。百合の香の身体に指一本も触れていないというのに……。十五歳でやくざ者の腕を斬り落とし、無宿渡世に生きて、爾来十有余年、こんなことは初めてだ。ありていに言えば、醜女と駆け落ちするなんざ、どう考えても無宿渡世の恥。どっかで早く捨てねば。これが今の本音である。

それにしても不可解だ。たかが村娘ひとりを通して駆け落ちしようってだけの話なのに、なんで与力やら同心やら十手もちの武士どもが、鉄砲組まで引きつれて出張ってくるのか。ものものしすぎる。

そのうえ、生まれとも待てとも言わず、いきなり鉄砲を撃ちかけてくるのも尋常じゃない。もしや百合の香は、代官が首を懸けても守らねばならぬ重大な秘密を握っているのかもしれない。そういえば村の衆も百合の香を特別扱いしていたような気がする。改めてこの娘の顔をまじまじと見直したが、醜女はやはり醜女にしか見えない。

二

梅雨が過ぎると、利根川の土手や付近の道端には、ぼつりぼつりとヤマユリ（山百合）が咲く。山のほうへ向かう林の一面にはヤマユリの群生地

があり、夏にそばの山道を通れば嘔せるほどの芳香が流れてくる。ちょうど今の季節だ。

百合の香は自分の名前ともかわりが深いことから、ユリの花が好きだった。いろいろなユリの中なかでも特にお気に入りなのがヤマユリだ。花が大きい。香しい。背の高い、つまり茎の長いものは六尺（約一八二センチ）を超える。日本の花のなかで最も美しいと信じていた。

この時代の日本人は知らなかったが、西洋には日本ほど大きなユリの花は存在しなかった。開国後、競って日本から球根を輸入した。とくに白ユリは純潔、高貴、威厳の象徴とされてきたが、日本の大きな白ユリこそ、それにふさわしい。

旅を急ぐ二人の目にも、ちらほらとユリの花が麗姿を見せてくれる。二人は矢切の渡しを柴又から松戸へ渡った後、西北行して再び利根川を逆に渡り、中山道に入って北上していた。百合の香にとつて追手を気にする旅とはいえ、つかの間、路傍のユリに心が慰められる。

源次楼は疲れ知らずに歩きながらも、頭のなかでは数日前の百合の香のことを反芻していた。

「源次楼さんは八年前も柴又へ来て、困っていた私を助け、また旅に出た」というのだが、記憶に霧がかかっている、どうにも思い出せないのだ。

八年前なら、百合の香はまだ九歳ぐらいの子供だったろう。うーん、しかし記憶にない。

大股に歩く源次楼についてゆくのは、百合の香には少々つらかった。ちよつと、源さん、もう少しゆっくり……と声をかけても、源次楼は冷たい。口癖のように「上州（上野の国）」に着くまでは安心できねえ」というのだ。

「どうして上州なのさ」と問えば、

「決まってるあな。国定忠治の親分のお慈悲にすぎるのよ」

といつても、源次楼が忠治（じしん）と昵懇の間柄というわけではない。義賊として今、日本中にその名を轟かしている国定忠治の名前を知っているだけのこと。文字どおり、有名人のお慈悲にすぎるといふ、虫のいい腹づもりがあるだけなのだ。なりゆきまかせの、かなりいいかげんな男である。

三日後の昼、休み茶屋で二人が一服していると、やはり遊び人風の三度笠に道中合羽の男が寄ってきて「あつりやー、兄いじゃねえか」と、すつとんきような声をあげた。源次楼が身構えると、相手は「おいおい、俺だよ俺。半目の権左だよ」と後ずさりしながらも、手は長脇差にかかっている。不意打ちに備えた態勢をとるのは一匹狼の無宿人の哀しい習性である。

「なんだ、権左か。どこへ行くんだ」

「源兄いとは駿河（えんしゅう）の国（駿河の国）の博奕場（ばくちば）でつて以来だから、一年ぶりだなあ。俺はこれから上州さ。国定忠治親分に会いに」

「ほう。そりゃ都合だ。おめえ国定の親分を知ってるのか」

「いや、親分にや会ったこたねえが、清水の巖鉄（いそ）てえめっぽう腕の立つ野郎と駿州で知り合つたんで、そいつを頼つてね。巖鉄は国定一家の子分のなかでも五指に入るぐれえの猛者（もさ）だあな」

「なおさら都合だ。一緒に行くべ」

「そつちの姐（あね）さんは」

「あとで話す」

三人は中山道から利根川を越えて日光例幣使街道に入り、木崎の宿の旅籠（はたご）に旅装を解いた。ここはもう上州、ここまで来れば国定一家のシマ田部井は目と鼻の先だ。

相部屋となつた老婆と孫娘の二人連れと親しくなつた百合の香は、楽しそうに連れ立って風呂に行つた。その間に源次楼は権左と酒を酌み交わしながら、矢切の渡しの一事件を語つた。

「ぶつ、じゃあ兄いは、駆け落ちを押し付けられ、不細工な押しかけ女房に取り憑かれちまつた、てえわけだ。おまけに鉄砲まで射かけられ

て」

「欲しいなら、あの女くれてやるぜ」

「名前は」

「百合の香」

「綺麗だね、名前だけは。けけけ。だが面倒の種になりそうな女だなあ」

「どうだい、もらうか」

「うーん、考えるまでもねえが……」

たしかに百合の香には面倒の種が宿っているのかもしれない。柴又の村の衆もなんとなく腫れ物に触るような雰囲気だった。世間知らずなところもこわい。簡単に騙されるおそれが多分にある。それが大事に発展しないと限らない。

後日判明したことだが、相部屋の老婆と孫娘が路銀を無くしたと悲しんでいたというので、百合の香は同情し、自分の金を貸してやったという。源次楼と権左がいけない間の出来事である。

「そりゃ騙りだよ。道中に多い寸借の騙りさ。やられたな。その金は金輪際かえってこねえぜ」
権左に指摘され、百合の香は呆然とした。ほそりと「返してもらおうとは思っていません」と言ったが、これは強がりではなく本音だろう。仮に相手が返す気になっても、どこを訪ねればいいのか判らないのだから。「めぐんであげる」とい

うのは相手に失礼だから「貸す」と言ったまでのこと。はなから返済は当てにしていけない。それより、もし騙りが本当なら、悲しい。人間を信じてはいけないうかしたら、と思ひ惑う。呆然としたのはそのためである。

三

国定忠治は、源次楼の予想を超えていた。

型どおり仁義を切って挨拶すると、険しい目で源次楼と百合の香を眺みつけた後、ニツと笑う。

「若夫婦にや、田部井の農家を一軒貸してやろう。しばらく、のんびりするがいい」

子分らの話を聞くと、忠治親分は恐ろしいほど型破り、常識なんざ糞くらえの人だ。任侠道もへつたくれもない。頑固で気が短い。残忍。頭の回転は速い。親しくなるとめつっぽう優しい。面倒見の良さは天下一品。剣の腕は、念流の免許皆伝と聞く。並の侍じゃ太刀打ちできぬ。強盗や賭場荒らしで荒稼ぎするが、金離れもいい。貧乏な百姓には金をばら撒く。堅気には手をかけない。
子分は、一声かければ七、八百人は集まると言うが、ふだんは数十人しか見かけない。忠治親分に対しては、もう絶対服従である。逆らえば文字どおり首が飛ぶ。腕一本なら好運だという。

どんな人間なんだか一言で表現しにくい。大物であることは確かだが、気持ちがいかもしれない。とにかく恐るべき人間のようだ。

源次楼はなぜか忠治に気に入られた。権左から見れば、自分と大差ない無宿人なのに、源次楼ばかりが特別待遇をうけるのが納得できない。といつて不満でも漏らそうものなら、一刀のもとに斬られるか、追放されるかであろう。誰もが怖気をふるうほど、わけのわからぬ親分なのだ。

国定忠治の本名は長岡忠次郎という。故郷の国定村の住人たちは、徳川の世になつてからは百姓だが、戦国の世までは武士だった家が多い。みんな苗字がある。苗字だけでなく、刀剣や銃砲も、ほとんどの家が隠し持っていた。百姓とはいえ剣術も盛んだった。忠治が剣に強いのも、そんな背景があつたからだ。

源次楼と百合の香が住む田部井村は、国定村の隣村である。源次楼の家には、必要なものは何でも子供たちが届けてくれる。なぜ、そこまでしてくれるのか、不思議だった。別格の客人扱いだ。はなから三下扱いの権左とは大違いである。

忠治は、軍師とも智恵袋とも呼ばれる日光の円藏を呼んで聞いた。

「円藏どん。ありゃ只者じゃねえな」

忠治が「どん」と敬称で呼ぶのは、子分の中でも円藏に対してだけである。

「いや親分。あつしにはどうもわからねえ」

「源次楼じゃねえ、あの嫁のほうよ。百合の香とかいう」

「ええ、なんか、普通じゃねえのは感じるんですが……、元坊主のくせに面目ねえ」

円藏は元「晃円」という名の僧侶だった。晁を分解して日光、円を円藏としたのである。

「ふむ。円藏どんでもわからねえか。あやかし（妖怪）みてえな……、うーん、もうしばらく様子を見るか。すぐにゃ手を出せねえな」

忠治はゲテモノ喰いだった。食べ物も女もゲテモノを好む。美味・美女も好きだが、異類にも目がな。百合の香にそこはかとなげテモノ臭を嗅ぎ取った忠治は、子分を使って密かに、交代で二人を見張らせた。権左もまた、命じられたわけでもないのに、二人を監視していた。やつかみ半分である。

四

数日後、満月の夜に突然、異変が起きた。

源次楼は農家の庭に面した縁側で、まん丸い十五夜の月を眺め、苺の煙を月影に吹きかけなが

らぼんやり考えていた。(百合の香は丸髻に結つて妻となる覚悟を示しているのに、俺は夫婦の契りも何も未だしていない。どうするか?)

そんなとき、蚊帳のなかで寝ていた百合の香が不意に、声を殺して苦しみだしたのである。源次楼が異変に気づいたのは、発作から小半刻(約三十分)も経つてからだろう。

「どうしたい。塩梅が悪いのか」

近づいて声をかけると、蚊の鳴くような声が返ってくる。「すみません、大丈夫……」と。

行灯の明かりを点した源次楼は、女の姿を見て驚愕し、声を失った。

そこにいるのは絶世の美女だったからである。否、そんなありきたりの言葉では表現できない。この世のものとも思われぬ神々しいまでの美人が、そこにいたのである。ほのかに、ユリの花のかぐわしい匂いにつつまれて。

垣根越しに見張っていた子分の甚太も、その後ろの岩陰にいた権左も、若い娘の妖しい変貌を目撃して喫驚し、目を睜いていた。

(続く)

(表紙説明)

■後藤塗 (ことぬり)

使い込むほどに、上にかけてた漆の透明感が増し、朱色が鮮やかに浮かび上がるといふ「後藤塗」。指でなぞるといふ技が、温かみのある紋様を生み出す。

宗家後藤益

所在地／香川県高松市磨屋町四一五

TEL／〇八七―八五一―〇七八六

FAX／〇八七―八五一―〇七八六

「酒林」随筆特集 第九十三号

平成二十九年一月一日発行

発行人 西野信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

〔本店〕 〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔高松本社〕 〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8	☎087-835-4133
〔高松支店〕 〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40	☎087-851-4133
〔丸亀支店〕 〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70	☎0877-23-4133
〔徳島支店〕 〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4	☎088-653-4133
〔松山支店〕 〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1	☎089-975-4133
〔岡山支店〕 〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209	☎086-296-2136
〔洲本支店〕 〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28	☎0799-22-0788
〔大阪営業所〕 〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14	☎06-6877-2671
〔東京営業所〕 〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12	☎03-3686-4133
〔観音寺物流センター〕 〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1	☎0875-56-3133
〔多度津工場〕 〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880	☎0877-33-4133
〔琴平工場〕 〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔金陵の郷〕 〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

〔大阪本社〕 〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2444
〔大阪支店〕 〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2447
〔東京支店〕 〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F	☎03-3552-3427
〔名古屋支店〕 〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F	☎052-561-5531
〔北陸営業所〕 〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F	☎0776-24-0967
〔上海西野貿易有限公司〕 中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号	☎+86-21-6278-9548
〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕 159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110	☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA	☎+62-21-2993-0822
---	-------------------



西野金陵株式会社
四国・琴平